

【都市と美術研究所】2026 年 7 月 21 日 発表要旨

フレームと虚像
—豊嶋康子、川内倫子、津田道子の実践から
Frames and Fictions:

From the Practices of Yasuko Toyoshima, Rinko Kawauchi, and Michiko Tsuda

小川綾子（東京都江戸東京博物館 学芸員）
Ayako Ogawa / Curator, Edo-Tokyo Museum

本発表では、豊嶋康子（1967-）、川内倫子（1972-）、津田道子（1980-）の3人のアーティストについて、「虚像とフレーム」という視点からその表現を考察する。彼らは世代や表現手法が異なる。豊嶋は身近なモノを通して社会制度を問い、川内は写真によって独自の視点で生命や世界を繊細に捉え、津田は映像インスタレーションで知覚の構造を探求している。一見すると共通点は少ないが、3人はいずれも現実における「フレーム（認識の枠組み）」を作品の中で可視化し、その内と外や現実と虚像の関係を問い直している。

① 豊嶋康子

豊嶋は1990年代より活動を開始し、自身の小学生時代の通信簿や賞状を用いた《発生法》シリーズ（97年～2000年）や、自身宛ての郵便物に記された名前を集めた《書体 水平 #1》（1999年）など、実在するモノを作品化してきた。これらは個人的な記録でありながら、学校制度や社会的評価といった個人を規定するシステムを浮かび上がらせる。作品の元になっているモノは豊嶋が実際に所有していたもので、フィクションではないが、情報の収集や反復によって、学校制度や評価基準といった社会のフレームそのものが可視化される。豊嶋にとっての「虚像」とは、私たちが無自覚に内面化している社会の枠組みが可視化された状態である。

② 川内倫子

川内は、独特の光や色あいに加え独自の視点によるフレームを通して世界を捉える写真家である。彼女の作品においては、人間、動物、植物、生と死が等価なものとして現れ、生命の輝きと儚さが同時に表現される。被写体として家族など親密な対象を撮影しながらも、川内の写真は私的な記録ではなく、現実世界と不可視の世界のあいだにあるような浮遊感を内包する。川内にとってフレームとは、写真というメディアを通して世界を切り取り、私たちの現実認識を別の像へと変容させる装置である。鑑賞者は川内の作品をまるで自身の記憶、イメージのようにも感じる。川内の写真は、個人的な経験を普遍的な記憶へと開きながら、現実とフィクション、個人と世界の境界を曖昧なものにする。

③ 津田道子

津田は、映像と空間を組み合わせたインスタレーションによって知覚を問い直す作品を制作してきた。代表作の一つである《あなたは、翌日私に会いにそこに戻ってくるでしょう。》*“You would come back there to see me again the following day.”* (2016 年) では、吊り下げられた複数のフレームや鏡、映像の間を鑑賞者が歩くことで、「見る私」と「見られる私」、「現在」と「過去」の自己像が交錯する。ここでフレームは映像を囲う枠ではなく、鑑賞者の知覚や自己認識を組み替える装置として機能する。さらに、鑑賞者が作品の一部となることで、自己と他者、内部と外部の境界が揺らぎ、知覚そのものが問い直される。

このように三者は異なる表現を用いながらも、フレームによって現実を組み替え、「虚像」を現実と対立する虚構ではなく、認識の枠組みから立ち現れるもう一つの現実として提示しているといえよう。

プロフィール：小川綾子

早稲田大学法学学術院非常勤講師。修士（文学、早稲田大学）。東京国立近代美術館美術課研究補佐員を経て、2025 年より東京都江戸東京博物館学芸員。専門は近現代美術。荒川修作＋マドリン・ギンズを中心に戦後前衛芸術を研究し、近年は戦後日本の女性アーティストに関する研究にも取り組んでいる。